感　想

古い友「老朋友」と新しい友「新朋友」
——2026年広島集会に参加して

大阪大学大学院生　屈 帥帥

広島での集会に参加して今年で 6 年目になるが、関われば関わるほど、自分にはまだ知らないことが多く、いまだに一人の「新人」なのだと感じる。毎年ここに来るたび、長年運動を支えてきた懐かしい「古い友人たち」に再会できる一方で、初めて参加する「新しい友人たち」との出会いもある。90 年代のまだ若かった頃、前例のない中でこの運動に飛び込んでいった先輩たちのことを思うと、ただ頭が下がる思いだ。毎年新しい顔ぶれが増える反面、もう会えなくなった方々もいる。それでも、昔から参加している人も、今年初めて来た人も、ここに集まる一人ひとりが日中の民間交流そのものなのだと思う。16 日の夕食のとき、これまで何度も来日している邵義誠さんの娘婿が、以前お世話になった日本の「古い友人たち」の近況を尋ねていた。しかし、返ってきたのは体調を崩されている方が少なくないという話で、あまり明るい知らせではなかった。かつて訴訟に力を尽くした新美隆弁護士と一緒に奔走した方々が今もこの集いを準備し、17 日の集会では新美隆弁護士を偲んだ。そして同時に、一般の参加者も遺族も、毎年新しい人たちが加わっている。邵莉娜さんもその一人だった。

初めて来日する遺族の多くは、「どうして日本の市民がそこまでしてくれるのか」「なぜ中国人のためにこんなことをするのか」と不思議に思う。邵莉娜さんもその一人だった。今年、私は通訳として邵莉娜さん夫妻の旅に全日程同行し、民間交流の本当の意味を間近で見ることができた。

夫のほうは何度も日本に来ているが、邵莉娜さんは今回が初めての来日だった。16 日に空港へ迎えに行ったとき、二人はとても楽しみにしていた様子で、移動中も日本の電車の静かさやトイレの清潔さにしきりに感心していた。

17 日に広島市内で開かれた集会では、以前作られたパネルの展示が加わり、邵義誠さんだけでなく新美隆弁護士を偲ぶ場ともなった。当日の何人かのお話や新しく発行された冊子の紹介を聞いて、日本の市民の力強さを改めて感じた。広島地裁で敗訴したあと、支援組織から学者、弁護士まで再び体制を整え直し、二審を準備した。花岡和解に尽力した新美隆弁護士は弁護団長として広島高裁で勝訴判決を勝ち取ったが、2006 年に若くして亡くなった。最高裁敗訴のあと、一日も早い解決を求めて市民団体が奔走し、さまざまな努力の末にようやく和解に至ったのだ。多くの遺族が言っていたことだが、「これだけ苦労して中国人を支援して、自分の国家が怖くないのだろうか」という心配はもっともだと思う。だが 17 日の夕食会のとき、邵莉娜さんはこう話していた。「父がなぜ何度も日



集会に参加した（左から）筆者、邵莉娜さんと夫

本に来ていたのか、やっと分かりました。日本に来れば、こんなに熱心な人たちに会えたからなんですね」。初めて日本に来た彼女は、これまで資料やテレビで見ていたものとは違う光景を肌で感じたようだった。市民団体が今も対面での開催にこだわり、遺族を日本に招いて直接交流を続けている意味は、まさにここにあるのだと思う。

18 日の安野での集会でも印象に残る場面があった。安野発電所のフィールドワークが終わったあと、参加者の皆さんが自分の席で持参したお弁当を静かに食べていた。その光景を見た邵莉娜さんはとても感動し、「どうして皆さんがこのように自発的に集まり、参加しているのか」と不思議がっていた。こうした光景は中国ではなかなか考えられないという。帰りの道すがら、彼女がその話をすると、隣にいた同じく初参加の日本人の方がこう話してくれた。「今日はたまたま時間があったのもあるけれど、昔、日本がたくさんの申し訳ないことをしたから、自分にも参加する責任があると思ったんです」。それを聞いた邵莉娜さんがどう思ったか私には分からないが、民間にはこうした考えを持つ人が本当に次々と現れるのだと実感した。あの「自分の国家が怖くないのだろうか」という疑問についても、帰りの車内でのこの何気ない対話が、彼女なりの理解につながったのではないかと思う。

19 日には平和記念公園を訪れ、慰霊碑に献花した。加藤陽祐さんから韓国人原爆犠牲者慰霊碑の歴史について解説を聞き、とりわけ岡原美知子さんが朝早くからプリントした写真を持ってきて手渡してくれたとき、邵莉娜さんは深く感じ入っていた。自分と同じくらいの年齢の方々がこんなに苦労し、心を配ってくれていること、そして自分たちの一度の訪問のために全員が全力で準備し手配してくれたことに、胸を打たれていた。



平和公園の慰霊碑に献花する

20 日の帰国の道中、二人はたくさんのお土産を買い、その前日には子どものために日本の文房具も買っていた。お土産を受け取った親戚や友人たちは、きっと広島での出来事を尋ねるだろうし、子どもも「広島ってどこにあるの？　どんな街なの？」と聞いてくるはずだ。そう考えると、彼らもまた、いつか広島を訪れる「新しい友人」になるのかもしれない。

この旅を通して、邵莉娜さんはきっとこれまでとは違う視点から日本を見つめ、父や家族の過去をより深く理解できたのではないかと思う。